事業報告

平成17年度
公開講座概要

奈良大学総合研究所では、毎年、生涯学習教育および大学開放の観点から、また大学における研究成果の社会への還元方法のひとつとして、「公開講座」を開催しています。

「公開講座」は、(1) 本学が企画・共催、(2) 研究機関が企画、(3) 自治体等との協力で、企画、の3種類で行われた。詳細については、下記をご参照いただきたい。

また、本年度は、高の原駅前に奈良市北部会館市民ホールが新たに開館しましたので、(財)奈良市文化振興センターと共催で地域の方々に身近な奈良大学を感じてもらえるように「高の原カルチャーサロン」の講座を前期「心理学講座」後期「文学講座」として開催いたしました。

【(1)に分類される講座】

〈1〉せいぶ市民カレッジ・第26回奈良大学文化講座

《開講年》1980年　《テーマ》文化財と歴史史料

《募集定員》各回300名（5回）　《受講者》1,213名

7月2日

遣唐留学生の墓誌

文化財学科　教授　東　野　治　之

昨秋、中国の西安で古代の日本人の墓誌がみつかった。遣唐使に加わって唐に留学しながら、現地で亡くなった人のものである。話題をよんだこの墓誌を読み解き、遣唐使による日中交流の意義を明らかにした。

7月16日

奈良が育てた幕末の政治家
—川路聖謨—

史学科　教授　鎌　田　道　隆

江戸時代の奈良の名奉行の一人に数えられる川路聖謨は、裁判の迅速化、貧民の救済、植

樹・緑化運動で治績をあげた。実は彼は、奈良に住み、奈良で学ぶことで、日本の歴史と文化と庶民の生き方を体感し、日本をしっかりと語れる国際人へと成長していた。そして、北方領土の交渉を含むむつかしい日露和親条約の協議に主導的な役割を果たした。

8月6日

考古資料からみた邪馬台国

文化財学科　教授　白　石　太一郎

最近の考古学研究の進展の結果、邪馬台国の所在地は近畿の大和である可能性がきわめて高くなってきた。邪馬台国を中心とする倭国連合はなぜ出来たのか、さらに初期ヤマト王権への展開過程などを考古学資料から考えた。

8月27日

「多武峰縁起絵巻」の謎

文化財学科　教授　塩　出　貴美子

奈良県桜井市多武峰にある談山神社は、藤原鎌足の廟所であり、鎌足を御神体とする神社である。当社に伝来する「多武峰縁起絵巻」四巻は、鎌足の伝記が大半をなし、これにこの地が廟所となるまでの由来、興福寺関係の事績、および尊像（鎌足像）破裂のことなどを書き加えたものである。本絵巻について興味深く思われるのは、通常の絵巻とは異なる特徴―絹本であること、天地が48センチ余りと大きいこと、詞書が漢文で、しかも色紙形に書かれていることなど―がある点である。また画面においては、縦にも横にも大きなスペースを活用して長大な連続画面構成を形成するが、画面は連続しているのに図様が断絶している箇所があったり、上下を霞あるいは雲で二段に分かつところが多いなど、やはり絵巻としては不可思議な構成が見られる。このような画面の特徴を分析し、そこから本絵巻の謎―「多武峰縁起絵巻」は絵巻か？―いう点を考察する。

9月10日

皇太后による執政の形
～呂后・西太后を中心に～

史学科　助教授　角　谷　常　子

日本では古代を中心に8人10代の女帝が現れたが、中国では則天武后ただ一人である。なら

ばそれほどに女性が政権を握るのが難しいのかというと、実際はそうでもない。「臨朝称制」あるいは「垂簾聴政」と呼ばれる、皇太后による皇帝代行体制が少なからず存在する。よく知られた例では、漢の劉邦の妻呂后や、清の西太后があげられる。ではなぜそうした体制ができたのか。その原因は、父母と子における絶対的上下関係と夫婦一体原則、及びオイと母方オジとの結びつきの深さにあると考えられる。つまり、夫なきあとの妻が母としてもつ権力には絶大なものがある一方、母方オジに対しては敬意を払い、オジたちはオイを庇護する義務がある、という親族意識のゆえに、幼い皇帝を母たる皇太后が後見するとともに、オジ（皇太后の兄弟）が実質的な輔翼体制を作ることが行われたためと考えられる。

〈2〉第1回高の原カルチャーサロン
奈良大学心理学講座・文学講座

《開講年》2005年　《テーマ》前期：現代人の心を考える
後期：ロングセラーをめぐって―源氏、ほそ道、漱石―
《募集定員》200名（5回）　《受講者》764名

5月7日
「自由」と「束縛」の社会心理

人間関係学科　講師　卜　部　敬　康

私たちは現在、個人の自由を基盤とした民主主義的な社会に生きています。ですから、さまざまな場面で個人の自由意志が尊重されることを前提としています。「自由」は私たちに満足をもたらし、その自由が何らかの力で脅かされると苦痛や不快感を感じます。このことは一見「あたりまえ」のことのように思えます。しかし、同時に私たち人間は、「ある程度は束縛されたい」という、全く正反対の性質もあわせ持っています。自由であり過ぎるとかえってその自由を持て余し、不安に駆られたりするのです。よく社会問題となる悪徳商法や破壊的カルトとしての側面を持つ新興宗教はこうした人間の心を利用したものです。

以上は一例ですが、「自由」と「束縛」をめぐる人間の心のしくみを考えることを通して、現代社会の解読を試みることとします。

5月28日

こころのケアと健康

人間関係学科　教授　前　田　泰　宏

心理学的な観点から人間のこころの苦悩や問題について理解し、その解決を援助するための実践的な学問が臨床心理学である。こころの苦悩や問題は、程度の差こそあれ、誰もが日常的に経験しているものである。今回の講演では、主としてストレス心理学や認知行動的アプローチの立場から、こころのケアと健康について、以下の4点から解説を行った。すなわち、（1）ストレスをどのように捉えるのか、（2）ストレスに対処する自分の能力をどのように評価するのか、（3）どのような社会的支援（サポート）を得ているのか、（4）どのような対処スタイルを持っているのか、である。そして、状況に対する認知と対処のあり方（環境をいかに受け止め、それにどう対処するか、等）や情緒的・手段的支援ネットワークの有無が、こころのケアを考える上で重要なポイントになることを論じた。加えて、簡易リラクセーション法についての解説と実習を行った。

10月1日

光源氏と藤壺宮

国文学科　助教授　滝　川　幸　司

藤壺宮は光源氏の父桐壺帝の寵姫であり、源氏には義母に当たる。源氏は、藤壺に強い恋慕を抱くのだが、この二人の心情はすれ違いが多く、源氏の独りよがりの面もある。その点を、藤壺の視点から読解する。藤壺の心情は、源氏と比較するとわずかにしか描かれない。しかし、そのわずかな資料を読解していくと、源氏が言い寄ってくることを、つらく、また、不愉快に思っている場面ばかりで、藤壺から源氏に対して恋情を持っていると解釈できるところはない。

光源氏と藤壺宮との関係は、悲劇的な恋愛と理解されることがあるが、基本的には源氏の独りよがりであって、藤壺は源氏の愛情に答えようとする考えはなかったと読む他はない。義理の息子から言い寄られ、帝を裏切ってしまわざるを得なかった藤壺は、その点では、悲劇だといえようか。

10月15日

『おくのほそ道』の海賊版

国文学科　教授　永　井　一　彰

芭蕉の『おくのほそ道』が井筒屋庄兵衛によって出版されたのは、芭蕉没後8年目の元禄15

年のこと。以後寛政元年の再刻を経て、明治中期に及ぶロングセラーとなった。

同じ手間隙をかけるのであれば、売れない本よりも売れる本を扱いたいと思うのは本屋人情の然らしむるところ。そこに、本屋仲間で堅く禁じられていた筈の重版（海賊版のこと）が、近世期を通じて横行した理由がある。売れ筋の出版物に重版が付き物であることは今も昔も変わりは無かった。『おくのほそ道』とてその例外ではなく、それをそっくりそのまま踏襲したスタイルの重版２種を始め、『芭蕉翁奥細道拾遺（ばしょうおうおくのほそみちしゅうい）』のように、明らかに『おくのほそ道』を意識したと思われる装丁・内容のもの数点がある。

この講座ではそれらの重版を紹介して、重版に正規版元がどのように対処したのかを考えるとともに、『おくのほそ道』同様ロングセラーとなり重版が数多く出回った小本『俳諧七部集』に比べ、『おくのほそ道』の場合、重版が比較的少なくて済んだ理由についても探ってみたい。

10月29日

夏目漱石『心』、その他

国文学科　教授　浅　田　　隆

漱石の『こころ』は没後90年を閲した今日においてなお、高等学国語教材として採り上げられている。教科書では主として「下　先生と遺書」の章の、それも抜粋でしかないが、その抜粋部分と触れ合った生徒たちが興味と関心を抱き、作品全体を読みたいという形で、『こころ』の読者になっていくということもあるようだ。しかしそればかりとは言えない。例えば新潮文庫の『こころ』だが、昭和27年に初版を出し、平成３年までで667万冊が売れているとか。新潮文庫のロングセラー第１位である。新潮文庫以外にも作品を収録する他社の文庫もあるわけだから、とてつもない冊数である。

また『漱石全集』は漱石死去の翌年に岩波書店から出た第一次全集以来、岩波だけでも10数回出ており、さらに、漱石の著作権が切れた昭和21年以後には岩波以外の出版社から「全集」と名のつくものだけでやはり10数回出されている、というように、『心』に限らず漱石そのものがロングセラーだと言える。

本講座では以上の事柄と共に、朝日新聞連載時の新聞コピーや関連書簡などを用い、作品『こころ』の成立事情と背景や作中の謎などについて概説した。

〈３〉第５回世界遺産公開講座

《開講年》2001年　　《テーマ》世界遺産とその周辺

《募集定員》各回100名（６回）　《受講者》576名

4月17日

平城京の材木を運んだ万葉びと

国文学科　教授　上　野　　誠

この講座では、『万葉集』巻１の79および80の歌を講読しながら、遷都の文学について考えた。

或本、藤原京より寧楽宮に遷る時の歌

大君の　命恐み　にきびにし　家を置き　こもりくの　泊瀬の　川に船浮けて　我が行く川の　川隅の　八十隅落ちず　万度かへり見しつつ　玉桙の　道行き暮らし　あをによし　奈良の京の　佐保川に　い行き至りて　我が寝たる　衣の上ゆ　朝月夜　さやかに見れば　たへのほに　夜の霜降り　石床と　川の氷凝り　寒き夜を　息むことなく　通ひつつ　造れる家に　千代まで　いませ大君よ　我も通はむ

反歌

あをによし　奈良の家には　万代に　我も通はむ　忘ると思ふな（巻１の79・80）

当該歌には、旧都への愛着、遷都に従事したものの苦労、新都への祝福があらわれている。これは、一つの讃歌であり、藤原京関係歌の表現を比較しながら、その表現の妙について考えてみた。

5月8日

日本・外国の自然遺産地域と人間との関わり

地理学科　教授　池　田　　碩

ユネスコが指定する世界遺産には、自然･文化・複合遺産地がある。今回は自然遺産地の状況について報告する。

指定の条件としては①重要な地質・地形　②他に例のない生態系　③優れた景観　④生物多様性―などの要件を満たす自然地域の存在が対象で、現在154ヶ所（2005）が指定されている。

このうち私自身が現地を訪ね、若干なりとも調査を行ってきたうち、外国ではイエローストーン･グランドキャニオン･イグアス・グレートバリアリーフ・黄山・シェィセル諸島などの状況について紹介する。それらのうちここでは、特にUSAの「イエローストーン地域」について、特徴と問題点を記しておく。北米大陸ロッキー山脈の雄大な山岳地形と火山地質がベースで、世界最大の間欠泉・巨大なカルデラ湖などが森林に包まれるように存在している。その中にはオオカミを頂点としてクマ・エルク・シカ・ムースなどが連鎖して生息する生態系を形成していたが、周辺の開拓・狩猟・観光化が進みだすにつれ、オオカミが害獣とされて狩猟の対象となり、1940年頃には絶滅した。その結果エルクやシカが急増して生態系に混乱をきたした

ため、1995年にはオオカミをカナダから移入し生態系の復原を目指している。一方バイソンを保護してきたために増加していることへの対応にも苦慮している。さらに1872年USA最初の国立公園として指定以来森林火災が発生するたびに消火に務めてきた結果、森林密度と地域が増加、周辺の草原や湿地にまで拡大してきてしまった。つまり管理することで人為的に生態変化を招いた事に気づき、1972年から落雷などの自然発火による火災は消火しないことにするなどの経過をたどり現在は危機遺産地とされてしまっている。自然の状況のままに、保全・保護していくことへの思考と対応の難しさを痛感させられた。

日本では1993年に巨大な杉の大木を有する「屋久島」とブナ林に包まれた「白神山地」が指定され、2005年には流氷がもたらす豊かな生態系の連鎖地域として「知床」が加わることになった。次の候補地としては「小笠原諸島」、「南西諸島」が挙げられている。

しかし、日本としては最初から最も指定を要望してきたのは「富士山」とその周辺地域であった。ここでは富士山が指定させてもらえない理由を通してユネスコと日本側の思惑のズレを考えておこう。

ユネスコから派遣された調査官が現地を視察した後、指摘された内容には唖然とさせられてしまった。すなわち山中から山頂にかけての登山道や宿伯施設の整備が不十分であり、特にトイレの垂れ流しへの批判。山麓にかけては大型ゴミや産業廃棄物の不法投棄が多いことと乱開発が進む状況に憤りを感じたと。そしてこれが日本人の感覚なのかという極めて深刻な報告書が出されたのである。このための対応も考えられたが、とても現在の状況下ではどれもクリアーできない。しかし、それでも富士山を指定してほしいという地元の要望は強く、自然遺産が無理なら文化遺産ではどうだろうとも考えられている状況である。

やはり指定には、すばらしい自然や生態が存在しているだけではなく、そこに居住している人々の生業や環境に対する思考、すなわち自然と人間との上手な共生・関わり方が大事なのである。「富士山」が認めてもらえるのはいつになるのであろうか。我が国の自然環境を考える場合の努力目標としていかねばならないのである。

6月12日

レバノンの世界遺産
—戦争と開発のはざまで—

文化財学科　教授　西　山　要　一

アジアの西の国・レバノン共和国は地中海に面して水と緑に恵まれ、日本とよく似た温暖な気候の国である。この国に5つのユネスコ世界遺産がある。アルファベット発祥のビブロス遺跡、港湾都市のティール遺跡、巨大神殿のバールベック遺跡、宮殿建築のアンジャル遺跡、そして、レバノン杉のカディーシャ渓谷である。5000年前に始まるレバノンのダイナミックな歴史と文化、そして自然と社会を余すところなくあらわしている。

1975年に始まるレバノン内戦中にこれらの文化財が世界遺産に登録されたのには大きな意義がある。現代社会に広がる理不尽な国家・民族・地域間の争いから文化財をまもり、平和構築の契機にしようする強い意志が込められていることである。現代また未来をも視座におく世界遺産の役割を示すものとして注目に値する。

7月10日

世界遺産と先住民族

―カカドゥ国立公園とマチュピチュ歴史保護区―

史学科　教授　青　木　芳　夫

世界遺産、とくに世界文化遺産はけっして孤立して存在しているのではなく、先住民族や永住者をはじめとする地元住民の暮らしや有形・無形の文化からなる大海の中に共存していることが、近年ますます明らかになってきている。その結果として、世界遺産概念は、「文化的景観」や「世界無形文化遺産」に象徴されるような拡大・発展をとげてきた。

一方、かつて先住民族は世界各地で、例えば国立公園の指定を機会として、居住地から追われるという悲しい歴史もあったが、世界遺産理念の普及と軌を一にするかのように、政治・経済・社会・文化の諸領域で広範な先住権が国際的に承認されるようになり、今日では多くの国々が自らを多民族・多文化社会と規定している。

本報告では、ミラル氏族を中心とするアボリジニの拒否・抵抗によりウラン開発が阻止されたカカドゥ国立公園（オーストラリア）の例と、周辺の渓谷におけるインディヘナの暮らしと観光開発の行方が心配なマチュピチュ歴史保護区（ペルー）の例を紹介した。

8月7日

保存と観光のはざまで

現代社会学科　助教授　尾　上　正　人

本講演においては、２つのテーマを設定した。すなわち、世界遺産をはじめとする文化財・文化遺産にとって、保存すべき状態とはどのような状態の謂か、次に、保存と観光の両立（ないし相克）という問題を、どのように考えるべきか、である。第１に、文化遺産は人間の持続的な社会的営みの歴史的な構築物であるので、どの時点の状態を保存すべき目標として設定したらよいのか、実は定かでない部分が多い。また、現実問題として保存すべき状態が政府・自治体・住民などによって共同主観的に設定されてゆく過程で、本来は歴史的に存在しなかった状態が理想として創り出される場合もある。こうした事態を踏まえて第２に、ホイアン宣言でも謳われているような住民主体の「住みながら」の保存活動は、保存すべき状態を住民自身の

イメージで設定し変化させてゆく点で、むしろ評価すべきものである。観光業を地域振興の柱とすることで住民を保存活動へと動員してゆけば、保存と観光の両立は決して不可能な課題ではない。

9月11日

世界遺産学ことはじめ

名誉教授　水　野　正　好

『古都奈良と文化財』が世界遺産に登録され、奈良は多くの人を迎え喜びと饒わいで活気づいている。平城宮跡、東大寺、興福寺、元興寺、薬師寺、唐招提寺、春日大社、春日山原始林8遺産面積616.9ha、緩衝地帯1962.5haがその対象地となり、これらの遺産保護のための歴史的環境調整区域539haが付加されて全体を構成している。積極的な保護と活用が期待されている中、各遺産の個性の強調が必要かと考える。平城宮跡は朱雀門についで現在大極殿復原工事が進捗中。遺跡となり地上に全く遺構を見ない現状では、発掘調査の実施で地下に埋る遺構を発掘し、成果に基づいて着実に遺構整備することが望まれる。その復原過程が常々社会に示され情報を流布することが望まれるであろう。東大寺は盧舎那大佛の2度にわたる罹災とその復興の歴史を行基・重源・道安・公慶上人の活動―わけても宗教的復興活動―勧進の姿で見ると今なおある東大寺の蘇生維持のエネルギーがどこにあるかが窺える。興福寺の場合は天皇・藤原氏の手で建立されるエネルギーが各時代を貫き氏の力で長く復興維持が果たされていたが、明治の廃仏毀釈の動きの中で僧の春日社への移動で宗教活動が衰微(び)し、上地により寺坊地は塀まで壊ち、やがて所有は国有化、結局僅かの伽藍地を除き公用地として県庁、師範学校用地として景観を一変させ往時の繁栄を失い、一部は奈良公園と化し往時の興福寺を偲ぶ「よすが」を失った。元興寺は飛鳥寺の移建で誕生――宝徳年間まで堂々たる景観を保ったが一揆で極楽坊以外の伽藍建築を焼亡、奈良時代の智光、禮の極楽感得の地、極楽坊のみが遺存してきた。奈良町の極楽信仰の支えあっての今日である。三寺は三様の歴史を描いている。世界遺産として意義づける時、それぞれの文化財はその特色ある歴史を活かし個性化し、社会に訴えるべきであろう。個性を訴える世界遺産が息づく時、初めて奈良も、歴史も、文化も息づき新しいエネルギーを生み世界に発信する遺産となるのである。

〈4〉第14回桜井市生涯学習シリーズ・奈良大学教養講座

《開講年》1992年　　《テーマ》郷土を学び、新しい時代を知る

《募集定員》100名　　《受講者》233名

5月22日

箸墓古墳は卑弥呼の墓か

文化財学科　教授　白　石　太一郎

神体山三輪山の西麓にその巨大な墳丘を横たえる桜井市箸中の箸墓古墳については、これを卑弥呼の墓とする説が昭和初期から提起されている。進展が著しい最近の古墳の年代研究の成果などから、この問題を再検証した。

6月19日

中国人留学生と日本

教養部　教授　蘇　　徳　昌

日清戦争と日中戦争の後、中国人留学生が大量に日本に留学に来た。彼等は日本で何をどう学んだか。帰国後、日中関係にどうかかわったのか。魯迅・周作人・郭沫若と3つのタイプに分類し、その全容を明らかにする。

7月24日

良寛景慕

—高齢社会を生きるために—

理事長　市　川　良　哉

良寛は不思議な人物である。人生を生きることの根本に切り結ぶような仕方で、私たちの心をぐっと引きつける。彼は自己を人生をじっと見つめている。それが彼の出発点である。時代は、それがどのような時代であっても、人間に対してどう生きるべきという問いを常に投げかけている。良寛はその問いに大きなヒントを与えてくれる。

焚くほどは風がもてくる落葉かな

日本人の歴史はじまって以来の高齢社会を生きるわれわれに、良寛の洒脱恬淡とした生きざまは、多くの示唆と共感を与えてくれる。

9月18日

情報社会の中のわたしたち

現代社会学科　教授　湊　　敏

かって、“人類は情報により亡ぼされる”と予言された先生がおられました。現在のインターネット社会はまさにこの予言どおり進もうとしてます。ただ、“便利である”という理由だけで、多くの情報が電子化されています。はたして、“便利である”ということは、私たちを幸せにしてくれるのでしょうか？

ここ10年ほどを振り返ってみれば、これまであまり聞くことのなかった“ゆとり”や“個人情報の漏えい”といった言葉をよく聞くようになりました。何故このような言葉を聞くようになったのでしょうか。この理由は、現在の私たちの生活が便利になり大変忙しくなったため“ゆとり”がなくなり、また情報が電子化されたため“個人情報の漏えい”が簡単に起こるようになったからです。

このような時代に生きる私たちはどうすればいいのでしょうか？

10月23日

成長し続ける大人になるために

教養部　講師　中　戸　義　雄

フリーターやニートの増加に対して「最近の若者は…」と嘆く大人は多い。しかし、このフレーズは人類の歴史と同じぐらい古いといわれるものであり、大人たち自身もかつては同じことを先行世代からいわれていたはずである。つまり、現代の若者が置かれた状況を理解することなく、彼らをただ非難しても意味はない。とりわけ現代は、若者が大人になることが困難であるだけではなく、大人が自分自身を大人であると規定することも難しくなっている時代なのである。

急激に変化する現代社会の中では、大人自身も変化・成長することを余儀なくされる。若年層、高齢層ともにライフコースにおいてモデルなき時代を生きている。そういった中で、先行世代が後継世代にどのようにかかわっていくのか。これは、大人自身が自分の生き方を問い直すことにもつながっていく。たとえば、「頭ごなし」の説教ではなく、「対話的」な説教をすることは先行世代の一つの責任といえるだろう。

〈5〉第13回都祁村生涯学習シリーズ・奈良大学教養講座

《開講年》1993年　　《テーマ》自己実現をはかる生涯学習

《募集定員》100名　　《受講者》133名

6月5日

都祁の氷室と長屋王

史学科　教授　寺　崎　保　広

『日本書紀』に次のような話がある。

仁徳天皇の兄が都祁で猟りをしていた時にイオリを見つけ、従者に「あれは何か？」と尋ねたら、「氷室でございます」と説明し、それから代々、都祁の氷室から天皇のもとへ氷が献上されるようになった。

これが氷室の起源を語る史料で、そこに「都祁の氷室」が登場するのである。

講座では、これを手がかりに、古代における氷室がどういうもので、どこに置かれ、どのように運営されていたか、といった制度の概観を行った。

次に、1988年に行われた発掘調査で、平城京長屋王宅から「長屋王家木簡」が発見され、その中に氷室の木簡が含まれていることを紹介した。木簡によれば、奈良時代には、氷室は朝廷が管理するだけではなく、長屋王も個人として氷室を所有していた、という実態が浮かび上がってきたのである。

6月19日

中高齢者の健康について
—運動とスポーツの視点から—

教養部　教授　田　原　武　彦

人は、誰でも加齢とともに体が徐々に弱っていきます。そのことを特に感じるのが中高年期です。人間ドックの結果に一喜一憂したり肩こりや腰痛に悩まされるなど、中高年にとって「健康」は、最も重要な課題になっています。また、一方で運動不足を痛感するのもこの時期です。

今日の高齢化社会を考える場合、「幸福な老い」や「活力ある老後」といった言葉に代表されるように、高齢期を積極的に過ごし、いつまでも健康的で幸福な老後を送ることも重要であります。

本講座では、中高年の健康を維持・増進の立場から、身近でよりよい運動の方法や楽しく、

明るく、継続的に実施できるスポーツなどについて実技を取り入れながら考えていきます。

7月3日

歴史の中の生死観
—フランス文学を中心に—

教養部　教授　田　中　　良

歴史は常に文学を生み出す。そして文学は子が親に似るように歴史を映し出す。ある時代の人々がいかに生き、いかに死んでいったか、それは歴史学、考古学等によっても跡づけることはできるが、文学はより凝縮した形でそれを私たちに伝えてくれる。この講座ではフランスの17世紀から20世紀にかけて書かれた3つの小説を採りあげ、そこに表れた生死観について考える。その小説とは、ラ・ファイエット伯爵夫人の『クレーヴの奥方』(1678)、スタンダールの『赤と黒』(1830)、カミュの『異邦人』(1942) である。『クレーヴの奥方』は、17世紀、ルイ14世の絶対王政下で、『赤と黒』はフランス大革命とナポレオンの帝政の後に、そして『異邦人』は第二次世界大戦中に、といった歴史を背景に3作品は書かれている。これら3作品の主人公たちがいかに生き、いかに死んでいったか、それを考察するとともに、3作品における生死観の違いの中に大きな歴史的流れを見たい。

7月17日

自己実現につまずく青年の物語
—森鷗外『舞姫』—

国文学科　教授　浅　田　　隆

今年は明治維新から138年目ということになる。明治維新ははるか彼方の出来事であるように思いもするが、日本最古の歴史の地奈良からすると、わずかに138年前でしかない。

江戸時代までの封建体制下にあっては、個人は家や村や藩などの組織のために存在するものと考えており、個人としての価値は所属する組織のためにいかに有用であるかによって評価されたりもした。

今日、個人は個人のためにあり、組織、社会は個人の契約関係の上に成立する、といった存在認識が一般化した時代に生きる者には考えられないような時代が、かつては存在したのだ。そのような時代の中で、個人が「自己」の意識に目覚め、自分らしくありたいと願うようになったとき、様々な障害が個人の前に立ちはだかり、自己実現を阻む。

森鷗外の『舞姫』を見ることで、そのような問題を見つめた。

〈6〉第18回社会学部連携講座

《開講年》1988年

《テーマ》何を食べるか、食べないか：文化人類学と進化心理学から考える

《募集定員》各回30名　　《受講者》49名

10月7日

遺伝子といっしょに進化する食文化！

人間関係学科　講師　大　坪　庸　介

食に関わる進化心理学的知見を紹介した。具体的には、最初に食物への選好の変化であるつわりの適応的意義を論じ、食物への好みが生物学的要因により規定される可能性を示した。次に、食文化の一部を形成するスパイス利用の様態が、スパイスのバクテリアを殺す能力を適応的に利用した結果生じたとする説を紹介した。最後に、遺伝子と文化の共進化の例として、生乳を飲む文化、ソラマメ・アレルギーの多い地中海地方の食文化についての議論を紹介した。

10月14日

食と文化のダイナミズム
—インド料理の場合—

現代社会学科　講師　松　川　恭　子

料理と社会の関係について、文化人類学的知見を紹介しながら以下の2点について考察した。（1）特定の文化における社会関係が料理するという行為に反映されていること、（2）社会の変化とともに料理の性質も変わっていくこと。インドの事例を使用し、（1）については、インドの浄不浄の考え方と料理に関わる特定のカースト集団の存在について紹介した。（2）に関しては、近年のグローバリゼーションの動きとインド料理の世界中への拡大の関係を論じた。

10月21日

中華料理における食物の文化的意味とタブー

現代社会学科　助教授　芹　澤　知　広

食文化への人類学的アプローチのなかで、とくに文化記号論を採りあげて解説した。そして、その議論を踏まえて中国の事例を紹介した。中華料理においては、テーブル・マナーの規則が

厳格には定められておらず、食材もあらゆるものが使われているが、宗教的なタブーに関わる興味深い現象をいくつも見ることができる。健康観と結びついた食物分類や、精進料理に見られる特異な動物分類などについて、映像も交えながら説明した。

【(2)に分類される講座】

〈1〉公開講座フェスタ2005（阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット）

《加盟年》1999年　《テーマ》奈良時代の役人と木簡

《講　師》史学科教授　寺崎　保広

《受講者》146名

〈2〉教員を対象にした研修講座（奈良県立教育研究所）

《開講年》2003年

《テーマ》列島先史の言葉を探る　《講　師》国文学科教授　木村　紀子

《テーマ》考古学―倭人の形容と装い　《講　師》文化財学科助教授　植野　浩三

《募集定員》100名　《受講者》48名

〈3〉奈良県生涯学習カレッジ「奈良県大学連合依頼講座」（奈良県社会教育センター）

《開講年》2001年　《テーマ》数字で読む社会

《講　師》現代社会学科教授　道明　義弘

《受講者》80名

〈4〉奈良県生涯学習カレッジ（奈良県社会教育センター）

《開講年》2001年　《テーマ》楠正成の物語―『太平記』から『理尽鈔』へ―

《講　師》国文学科教授　長坂　成行

《募集定員》100名　《受講者》118名

【(3)に分類される講座】

〈1〉第8回こおりやま市民大学

《開講年》1998年

《主　催》大和郡山市中央公民館（三の丸会館）・奈良大学協力

《会　場》大和郡山市中央公民館（三の丸会館）　3階小ホール

《テーマ》歴史・文化や今日的課題を学び、21世紀を夢と希望に満ちた人生にしよう

開催日・演題・講師

回	開催日	講師	演題
1	6月4日（土）	名誉教授　水野　正好	額安寺―そのひとこま・ひとこま
2	6月11日（土）	国文学科教授　永井　一彰	板木（はんぎ）は語る
3	6月18日（土）	地理学科講師　土平　博	城下町の「内」と「外」
4	6月25日（土）	教養部教授　岩崎　敬二	天然記念物と外来生物：日本の貴重な自然とそれを脅かす生物たち
5	7月2日（土）	現代社会学科教授　元濱涼一郎	漂泊の山民 ―イメージの木地屋とその実像―
6	7月9日（土）	地理学科教授　高橋　春成	農民の文化財、シシ垣に注目してみませんか！